

## 活動報告 1

# 模擬少年審判実施報告書

白鷗大学法学部准教授

平 山 真 理

## はじめに

2011年12月2日に、宇都宮家庭裁判所において実施された模擬少年審判に本学法学部生が参加した。その際の様子と今後の課題を以下まとめてみたい。

今回の模擬少年審判は、宇都宮家庭裁判所主催の「法の日週間」行事の一環として行われ、法学部学生がそれに応募し、参加するというかたちをとった。学生への参加呼びかけ等の広報と参加学生への支援については法政策研究所主催の行事として位置づけられた。

## 模擬少年審判への参加で得られるものは

今回の模擬少年審判では主催者側より審判の台本の提示があり、原則としてその内容を変更しない、という前提で参加した。昨年も本学法学部生が模擬少年審判に参加したが(本学法学部主催。宇都宮家裁の協力を得て行われた)、その際も模擬審判の台本の提供を家裁から受けたがこちらで変更を加えてもよいとの条件のもとで行われた(もちろん、変更点は逐一家裁側に連絡し、了解を得た)。

最初から台本がある中で参加するということになる、台本を作成する過程で得られる

学習効果は期待できないことになる。しかし、ただ台本に基づいて演じるだけではつまらない。そこで以下に述べるような様々な学習と準備を試みた。

## 模擬少年審判に向けた準備

家庭裁判所より送付されてきた台本は2本あった。一本は16歳の少年が友人に悪口を言われたことに腹を立て、暴行し、けがを負わせた傷害事件(以下事件A)。もう一本は暴走族に所属する15歳の少女が友人から金品を脅し取った恐喝事件である(以下事件B)。

事件Aについては、男子少年、両親、付添人(弁護士)、裁判官、調査官、書記官、被害者の母親役の計8役、事件Bについては女子少年、両親、裁判官、付添人、調査官、書記官の計7役が登場人物であった。

これらの役を演じたのは筆者の指導する専門ゼミナールⅠに所属する法学部3年生の学生のうち17人で、事件Aの調査官と事件Bの裁判官はそれぞれダブルキャストとした。

まずは、これらの役決めを行った。原則として学生らの演じたい役を希望してもらった。たちで彼らの自由意思に任せたが、意外だったのはいわば主役でもある少年役に当初希望

者がいなかったことである。一方で一番人気だったのは弁護士役であった。このように必ずしも希望通りではなかったかもしれないが、学生らは話し合いと互譲の精神で役決めを行い、それぞれの役が決定した。

役が決定した時点でまず行ったのは、それぞれの役のライフ・ストーリーを作成するという作業である。例えば少年であれば、なぜ事件を起こすまでに至ったのか、家庭内でのような問題があったのかを自分なりにストーリー作成してもらった。セリフの殆どない書記官役の学生にも「なぜ書記官になったのか」等のストーリーを作成してもらったが、演じる客体を深く理解することは、模擬少年審判そのものに深みが出てくるということを期待したため、である。

それと並行して、少年司法手続への理解を深めるべく、少年法について書かれた教科書について報告者を決め発表してもらい、ゼミ全体で議論するという講義を通常のゼミ時間には行った。つまり、学生にとっては模擬少年審判への参加は通常のゼミ時間にプラスしての作業、ということになるから、彼らも大変だったと思う。

さらに、出演する学生らの多くは裁判傍聴も経験した。これは、2011年10月7日に宇都宮家裁が「法の日週間」の行事の一環として、裁判傍聴をひろく市民に呼び掛けた機会に参加したものである。学生らが傍聴したのは当然ながら少年審判ではなく、刑事裁判であったが、多くの学生にとっては裁判傍聴は初めての経験であり、またそもそも成人の刑事裁判と少年審判はどのような異なるのか、という視点を持ちえたことの意義はあったと思われる。

また、これは模擬少年審判そのものとは関係がないが、参加した学生らの中には、小山市と小山警察署、そして白鷗大学が連携して始めた犯罪被害者支援のヴォランティア活動に参加していることも良い意味で相乗効果が

あったと思う。少年事件では少年の可塑性などを理由に被害者への配慮がとくに遅れてきたと非難されることが多いが、学生らは模擬少年審判を演じる上で「加害少年の健全育成も重要であるが、でも被害者はどうなるのか」という多角的な視点も持ちえたからである。とくに事件Aでは被害者の母親が審判廷で意見を述べる（少年法9条の2）ことが予定されていたので、被害者の視点を彼らが持ち得たことの意義は大きかった。

## 模擬少年審判当日

模擬少年審判には本法学部の学生だけでなく、本学の教員、都内の他大学の学生、裁判所関係者など多数の傍聴者が参加してくれた。平日の午後という、おそらくは参加者の集まりにくい時間帯であったことが懸念されたので、良かったと思う。

また、学生らは服装に至るまで凝って参加していた。すなわち少年役の学生2人は裁判所まではスーツ着用で来たが、各自の出番ではジャージとサンダルに履き替え、着替えの服をビニール袋に入れ、審判に持参するという凝った演出を行った（実際の審判でも、少年鑑別所で観護措置を受けている少年は、審判廷に衣類をビニール袋に入れて運んでくることが多いと聞いていた）。

当日は模擬少年審判開始の約2時間ほど前に家裁に到着し、予行演習を何度か行った。会場となったのは、審判廷ではなく、大会議室であったが、実際の会場での練習はその日が初めてだったので、色々修正をしながら予行演習を進めた。

予行演習を観察していて、学生らが少年審判により深い理解を進めていく過程を観察することができた。例えば、上述のように、事件Aでは被害者の母親が審判廷で意見を述べるのだが、審判の間ずっと被害者の母親は審判廷にいたのではなく、途中で裁判所書記官が誘導して入廷する。その際に、当初は書記

官は審判廷の外で待っている被害者の母親役の学生にドアを開け、「どうぞ」と入廷を促していた。しかし、被害者は心に大きな負担を抱えた中、意見を述べに来るのであるから、実際はドアの外に書記官が出て、入廷に付き添うかたちで審判廷に入ってもらうべきではないか、ということになり、本番ではその案が採用された。

また、練習を観察していると、更に細かい点まで学生らはよく考えて演じていることが分かった。一例をあげると、事件Bでは、少年役を演じた女子学生は最初だらしない格好で座り、ふてくされた様子であったが、審判の途中で父親役の学生がそれをたしなめる様子が見られた。少年はそれに対して最初は反抗的な様子をみせたが、審判が進む中で内省が促され、両親らがいかに自分を心配しているかを理解すると、今度は自ら姿勢を正し、声までも変えて演技に臨んでいた。

これらは筆者が指導したことではなく、学生らが台本を読み込み、役を理解してお互いと相談し合う中で提案された演出であり、ここまで深く考え演じている学生の姿を見ることは指導者としても嬉しい限りであった。

模擬少年審判終了後、宇都宮家庭裁判所の判事と調査官、書記官の3名の方々との間で意見交換会を持つことができた。参加した学生からは実際の審判はどのように行われるのか、被害者が審判廷に存在することはどのようなインパクトがあるのか等、活発な質問が出された。

家庭裁判所サイドからは模擬少年審判そのものにあまりコメントを頂けなかったが、当日傍聴して下さった本学ロースクール教員で元裁判官の山口忍先生からは「みなさんはただ台本を読むのではなく、各自の役をよく理解して演じていたところが良かった」とコメントして頂き、学生らも大いに感激していた。

その後、実際の審判廷や調停室、ラウンドテーブル法廷、また児童室(壁の一部がマジックミラーになっており、子どもの親権を争っている両親が面接交渉を行う)などを見学させて頂いた。

## 感想と今後の課題

原則非公開の少年審判手続について学生らが模擬というかたちで実際に演じることで、少年の処遇手続について理解が進んだことは大きな収穫であったと思う。以前は教科書で裁判や審判について記載された個所を読ませてもどこか「上滑り」してしまっている印象を受けることもあった。しかし学生らが実際に裁判を傍聴したり、役を演じることで、それぞれの用語が意味するところとその効果を理解でき、手続への理解に「奥行き」が出てきたように感じる事ができた。このことは体験型学習の大きな利点であろう。また、模擬少年審判への参加は2年続けて行われたため、経験者である4年生たちが今回参加した3年生に様々なかたちでアドヴァイスしていたのが大きなサポートとなった。まさに「経験と継続は力なり」、というところである。

また、今回模擬少年審判に参加したことで、家裁の方から「少年友の会」(非行少年や被虐待少年に対して行われる、友だち活動のボランティア。全国の家庭裁判所で行われており、大学生を中心とした青少年が参加している)の誘いを受け、参加した学生のうち何名かはそのボランティア活動に関心を持ったようである。

模擬少年審判に参加することで、学生らの視点や考察に広がりが出ることを期待したい。最後になるが、今回の模擬少年審判参加の機会を与えて下さった宇都宮家庭裁判所、また参加に際し御支援頂いた、法政策研究所と本学法学部にお礼を申し上げる次第である。